特選「演じる　～変われない私～」

私は、自分の実力以上のこの学校に入学できて嬉しかった。よい学生に変わるために、いろんな難しいことを演じてきた。

早起きは苦手だけど、朝一番に起きているパン屋さんの職人のつもりで、決して早くない早起きをした。自分の意見を発言することが苦手だけど、しゃべるなと言っても喋り続けるインド人のつもりで、頑張って少し話した。長いレポートを書くことが苦手だけど、やれやれと書きながら流れるような文章を繋げる村上春樹さんのつもりで、自分以外の人が読んでも決して解らない文章を書いてきた。だから、どれも、なかなかうまく出来ないし、私は、変わることができなかった。

演じても全く変われない私は、よくある小説の主人公のように、あてもなく家を出てみた。行きたいところに出かけ、食べたいものを食べて、やるべきことをすべて忘れてしまった。一週間が経った頃には、携帯電話を充電することも、忘れてしまった。ティファニーで朝食を食べたつもりになり、ライ麦畑のキャッチャーにもなったつもりで、回りの迷惑も考えずにいろいろ行動してしまった。でも、グレートギャツビーにはなれなかった。私には、本当にしたいこと、なりたい自分が定まっていない。だから、私は、結局、全く何も、変われなかったのだろう。

全く何も変われなかった私は、家に帰ることにした。帰る途中の道の木々、家々、それらの風景は、やはり何も変わってなかった。歩く人々も全く変わっていないというか、私には関係なく、人々は目的地に向かって動き、時間もいつもと同じように流れていたと思う。

ところが、自宅の扉をあけた瞬間に、全く変わってしまった世界が、目の前にあった。心配していた両親の顔は、私がいままでに見たことのない顔に変わっていたし、携帯電話を充電するといままでに見たことのない内容のメールが送信されてきた。それ以上に、学校の先生や助手さんに迷惑をかけていたことを聞かされ、世界が大きく変わっていることに気づいた。そこには、明らかに演じていない本物の顔や声があった。

いくら上手に演じたつもりでも、偽物は、演じていない本物には、敵わないことが解かった。だから、私は少し変わったかも知れない。